

金沢バイパス関係埋蔵文化財調査概報

金沢市藤江B遺跡

1970.7

石川県教育委員会

金沢市藤江B遺跡

調査期日	昭和45年4月20日、7月18日～24日
調査担当	高畑勝喜 橋本登夫 吉岡康暢 四柳嘉章
調査員	安村律義 荒木繁行 福田弘光 米沢義直 浅井勝郎
調査協力	村上 喬 石田 静子 金沢商業高校生

I 遺跡の位置

藤江B遺跡は金沢市藤江町に所在し、金沢～金石間を結ぶ金石街道に東接している。かつての古河北潟をとりまく三角州が、更に扇状地堆積物によってせばめられて成立した、三角州の部分すなわち河北潟低地に立地しており、標高は約5mである。付近一帯は「和名抄」に云う加賀国加賀郡大野郷に属し、(但し、和名抄には石川郡とあるが、これは誤り)昭和44年に北陸自動車道路に係る緊急発掘調査を実施した藤江A遺跡⁽¹⁾とは約500mの距離にあり、しかも同一レベルの微高地に立地していることは注目される。



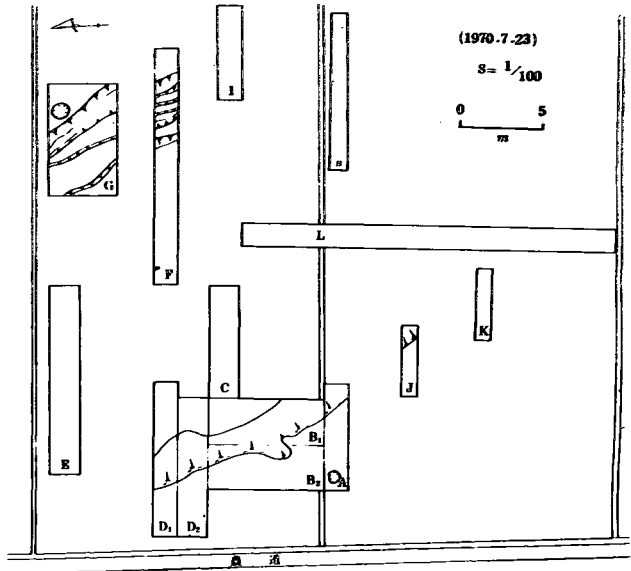
金沢 1/50,000 (1) 藤江A遺跡 (2) 藤江B遺跡
(3) 南新保遺跡

II 調査経過

昭和45年4月20日に高畑、四柳は藤江B遺跡の範囲確認のため、人夫20名にて試掘をおこなった(第一次調査)、A、Bトレンチを設定した。Aトレンチではピット状遺構、Bトレンチでは溝状遺構を検出したが、おりしも突発的に発生した金沢港南部地区造成工事区域内近岡、無量寺遺跡の緊急発掘のため、調査を7月に延期させるをえないこととなった。

7月18日より7月24日までの期間にわたって第二次調査を再開。8ミリ撮影開始、湧水がひどいため排水ポンプを使用。第1次調査時のBトレンチをD₂トレンチと改称、あらたにB、C、D₁、E、F、Gトレンチを設定した。層位については、表土(灰褐色土層)・暗茶褐色土層(遺物包含層)

砂質黄褐色粘土層（地山）の三層が認められ、遺物包含層は表土から-20~80cmの深さにわたっている。Aトレンチでは平安時代前期の溝状遺構を、Bトレンチでは須恵器、土師器、土錘を、Cトレンチでは弥生式土器を出土している。またG、Fトレンチにおいては、古墳時代前期に属する二段掘りの溝状遺構を検出し、これを追求するため、更にH、I、Lトレンチを設定したが、いずれのトレンチよりも検出されず、北方向にのびていることを確認したのみであった。ただHトレンチからは、月影式土器、宮地式土器



藤江B遺跡実測図

と、須恵器、土師器をともなり焼石が検出された。なお、Gトレンチでは月影期の溝状遺構に接して、宮地期の壟棺墓が検出され、また金石街道に最も隣接したMトレンチでは中層に弥生式土器を伴う倒木（写真D）、上層より丸瓦、「石田庄」名の墨書土器、土師器、クシ、木製品等を多数出土した。

Ⅲ 遺 構

(1) 平安時代に属するもの

a、溝状遺構

A、B、D、J各トレンチにまたがって、浅いならかな堀り込みを有する溝状遺構が検出された。幅がきわめて広く、湧水のため西辺のおち込みしか検出できなかったのがおしまれる。平安時代前期に属する多くの須恵器、土師器が出土しており、狭義の溝状遺構と解するにはいささか疑問があり、一種の作業場と考えた方が妥当かも知れない。

b、ピット状遺構

第一次調査により発見されたもので、深さ0.5m、平面1.2×0.75mの構円形プランを呈する。主軸は東西にあり、平安時代前期の所産と考えられる。

このほか、Hトレンチにおいて須恵器、土師器をともなり焼石が二個存在したが、焼土は皆無であった。

(2) 古墳時代に属するもの

a、溝状遺構

G、Fトレンチにおいて、二段掘りの溝状遺構を検出し、これが北方にのびる事を確認したが、一方、I、H、Lトレンチでは確認できなかったので、これが南方にのびているとは考えられず、

F～Iトレンチ間で終了しているか、あるいは急角度で東方にのびているのか、そのいずれかであろう。この溝状遺構は一段が上幅約1m、下幅約0.6m、深さ約0.4～0.5mで、二段で構成されている。溝内よりは、古墳時代前期に比定される月影式土器が出土していることから、同時代の遺構と考えてよい。

b、埋葬遺構

Fトレンチにおいて甕を埋納したピットが検出されたが、総合的に復原するならば、平面1.6×1.9m、深さ1.3mの楕円形ピットを掘り、その底に甕形土器を埋納したのち、いったん $\frac{2}{3}$ 程埋め、そのうけに供献用の小形丸底壺(2個)を納入したものと思われ、これよりして、一種の甕棺葬と考えたいのである。なお、ピットの主軸は南北にあり、これが営まれた時期は土器によって5世紀中葉ごろと推定される。

(3) 弥生時代に属するもの

弥生時代遺物は主として、Qトレンチより発見される。セクションによって、堅穴住居址らしき一方のおち込みを認めたと、排水ポンプを投入しても湧水がはげしく、確認するにはいたらなかった。

IV 遺物

(1) 平安時代に属するもの

藤江B遺跡出土土器のうち、平安時代前期に属する須恵器がその大半を占めており、器種としては坏(3～5)、高台付坏(6～9)、台付鉢(10)、蓋(11・12)等がある。坏では、通常のタイプである(4)が一番多く(口径1.8、器高3.6、底径8.5cm)、まれに(3)の如く底部に一段ないし二段のくびれを有し、底径に比して口径が大きく開くもの(口径1.9、器高3底径6cm)と、(5)の如く口辺に一稜を有するもの(口径1.2.5、器高3.5、底径9cm)とがある。(4は墨書土器「石田」)高台付坏では、小形で(6)の如く貼付け高台から、80度近くの角度で立ちあがるものと、(7)の如く60度で外反ぎみに立ちあがるもの(口径1.1、器高4、底径7cm)、更に大形で(8)の如くやや小形化した高台から、ゆるいカーブをえがいて外反するものと、(9)の如くずんぐりとした高台から、幾分内湾ぎみに立ちあがるものがある。(9)は底部にスミが多く付着しており、硯の代用として使用した可能性がある。(10)の台付鉢は、ふんばった高台から内湾ぎみに立ちあがり、口辺で外反し一稜を有する特殊な器形である。蓋には(11)の如く、口縁先端が屈折せず、外反ぎみの器体に扁宝珠をつけたやや大形のもの(口径1.7cm)と、(12)の如く肩がはり口縁先端の屈折が深い中形のもの(おそらく壺類とセットをなす)と口径1.2cm前後の小形のものがある。なお、ここでは松任市三浦遺跡⁽²⁾などでみられた、口縁先端が嘴状に屈折する該期での通常のタイプといわれる蓋が、あまりみられなかったことに留意したい。以上の須恵器は、灰色あるいは青灰色を呈し、胎土精良で焼成も良好であ

り、口クロの回転方向については、概して左まわりが多いようである。墨書土器では「石田庄」「石田」「卍」「×」「石」「幸」等と記されたものが、いくつか出土している。その他の遺物では、Mトレンチより発見された丸瓦、クシ、木製品、土碓等がある。

以上の平安時代前期の遺物のほか、(1)(2)のような平安時代後期のものも若干出土している。なお(2)は内面漆黒色を呈する黒色土器である。

(2) 古墳時代に属するもの

a、前期(14・15)

溝状遺構中より、古墳時代前期に位置づけられる月影式土器(甕、高坏)が検出された。(14)(15)は複合口縁をなす甕形土器で、口縁帯には5~6本を基調とする沈線文をめぐらし、(14)は口縁内面に斜行刻目が施されている。頸部内面以下は、例外なくヘラによる調整をおこない薄く仕上げているが、外面の櫛状工具による調整は顕著ではない。ともに灰褐色を呈し、胎土には石英を含んでいる。焼成はやや不良。

b、中期(13)

埋葬ピットより、宮地期に属する甕、小形丸底壺、高坏が検出された。母体である甕形土器は、口径16cm 推定高30cmをはかるもので、全体にススが付着している。(13)は小形丸底壺で、部分的に塗朱が認められる。このほか、Fトレンチからも該期に属する、甕、高坏形土器が発見されている。

(3) 弥生時代に属するもの

弥生時代遺物は主として、Oトレンチより出土し、器種としては甕、壺、コシキがある。(16)は口縁が大きくラッパ状に開く広口壺であり、口縁内面には整然とした櫛状工具による二段の綾杉状の圧痕文が、四つに区画わりして施されている。(17)は通常の甕形土器で、口縁外面に直角に櫛状工具で刻み目を施したものである。コシキは底径8cmのもので、普通の底部よりも立ちあがりの角度がゆるい。なお、ここではやや資料不足ではあるが、壺形土器にみる凸帯文、擬流水文、簾状文、三角列点文、甕形土器におけるいわゆる跳ね上り口縁が少ない点を指適できるように思う。

V 結 語

藤江B遺跡は前述したように、弥生時代から平安時代にわたる複合遺跡であり、それぞれ重要な問題点を提供した。以下それを、簡条的に整理してみたい。

(1) 弥生式土器について

本遺跡出土の弥生式土器の特色として、櫛状工具による広口壺口縁内面への整然とした綾杉状の施文、甕形土器口縁への櫛状工具による刻目等があげられるが、壺形土器にみる凸帯文、擬流水文、簾

簾状文、三角列点文、甕形土器にみる跳ね上り口縁が少ない点も指適できるように思われ、小松式土器よりも金沢市寺中遺跡出土土器に類似する。しかし編年の位置づけについては、現在寺中式土器をめぐって、これを小松式土器に後続するとみる見解⁽³⁾と、先行するとみる⁽⁴⁾両説があり一定していない。今後は両説を念頭におきながら、資料の集積をまって結論を与えたいと思う。

(2) 月影期の溝状遺構について

G、Fトレンチにかけて検出された溝状遺構は、おおよそ半円をえがくように周囲をめぐっていると推定されるので、いわゆるヘレデュームとの関係を重視したい。

(3) 甕棺墓について

Fトレンチより、楕円形ピットに甕を埋納し、そのうえに供献用の小形丸底壺2個を納入した甕棺墓が発見されたが、該期(5世紀中頃)の資料としては珍しい例といえる。一般的に知られる壺棺葬は、北陸地方では古墳時代前期に盛行した葬法であり、該期まで下降する例は知られていない⁽⁵⁾。今後追求すべき研究分野である。

(4) 墨書土器、丸瓦が提起する問題

平安時代前期に属する「石田庄」「石田」「++」「×」「石」「幸」等と記された墨書土器と丸瓦が発見されたが、その提起する問題は重要である。昨年発掘調査を実施した、藤江A遺跡にみる、掘立柱列を有する富豪層の住居跡の存在、また丸瓦の発見は在地豪族(あるいは中央権力?)を背景とする「幻の寺院」の存在を暗示するものであり、「日本靈異記」「三代実録」の記載を引用するまでもなく、藤江、畝田一帯は古代大野郷の中心であったといえる。「石田庄」の解釈については種々論議もあるが、この程発掘が終了した松任市横江遺跡からは東大寺領横江庄に関係するとみられる建造物、遺物が発見されており、ここでも今後の研究いかんによっては、古代文献史料に記載のない、「石田庄」の存在を推定できるかも知れない。

(文責 四柳)

[注]

(1) 高堀 勝喜・吉岡 康暢・四柳 嘉章(文責)

「北陸自動車道路関係埋蔵文化財調査概要報告書～藤江A遺跡」 石川県教育委員会(1969)

(2) 高堀 勝喜・金山 顕光・吉岡 康暢・浅香 年木

「加賀三浦遺跡の研究」 石川県教育委員会、松任町教育委員会(1967)

(3) 橋本 澄夫・荒木 繁行

「金沢市寺中遺跡の第I次調査」 石川考古学研究会々誌第12号(1969)

(4) 吉岡 康暢・荒木 繁行

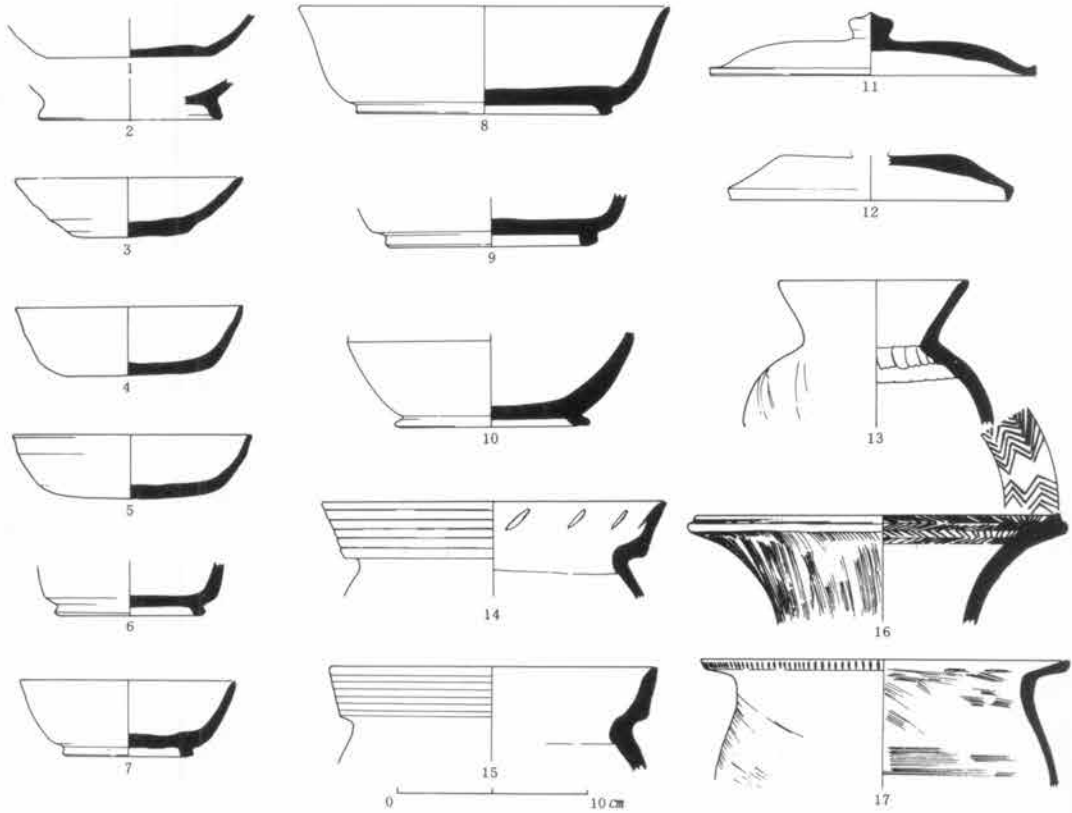
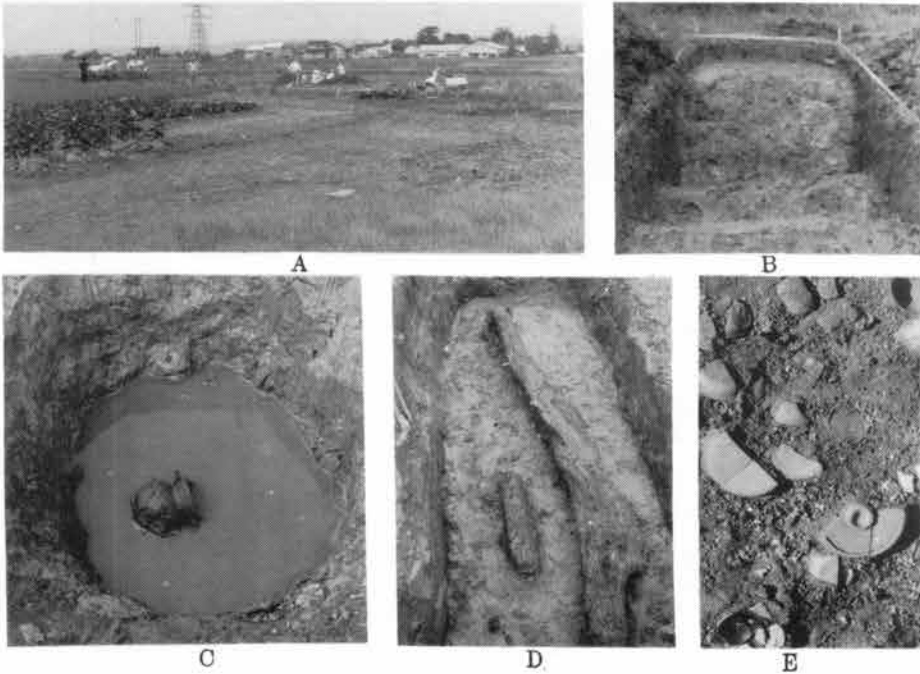
「金沢市畝田弥生遺跡調査予報」 石川考古学研究会々誌第13号(1970)

(5) 四柳嘉章

「石川県石川郡松任町倉部出土の壺棺-北陸地方の壺棺葬について-」

石川考古学研究会々誌第13号(1970)

(6) 注 (1)に同じ



A 遺跡、B 溝状遺構、C 甕棺墓、D 倒木、E 出土状況、1・2・7・16・17-C トレンチ、3・12-F トレンチ、4・6・8・9・10-D トレンチ、13 甕棺墓内